IMAJ ニューズ
国際MRA日本協会機関誌
NO.15
発行年月日　昭和53年3月20日
発行所　国際MRA日本協会
発行者　柳沢錬造
（非売品）　TEL. 03—374—7600
INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

新しいゴールを目指して

—ブレスベイン大会報告—

藤田幸久

木内信胤氏を中心にオーストラリア労使代表と懇談する日本代表。右からテッド・アーチャー（西オーストラリア店員組合）、ジム・ベッグス（メルボルン港湾労働組合）、トム・ラムズイー（B・H・P㈱役員）

—「平和な海」をめざして、二十八ケ国から—

「太平洋地域の国ぐにが互いに情熱を持っていたわり合い、創造的な力を解放する時、我々は太平洋をその名の通り「平和な海」にすることが出来る。」という昨年のマイケル・ソマリー、パプア・ニューギニア首相のメッセージを目ざし、一月七日から十五日までMRAアジア・太平洋地域国際会議は各大陸二十八ケ国三百五十余名の参加のもとに、オーストラリア・ブリスベイン市で開催された。「新しいゴールを目ざして」というテーマのこの会議にはサモワ、トンガ、ニューカレドニア、フィジィ、パプアニューギニア、ニューエイなど南太平洋諸島の積極的な参加が目立ち、日本からは二十四名の代表に、既に濠洲でのトレーニング参加者（五名）を加え、最大の代表団になった。世界経済調査会々長木内信胤氏御夫妻、元自衛隊陸幕長杉田一次氏御夫妻、畑千鶴子埼玉県知事夫人、榊たか子埼玉県議会議員、川島タミノ元衆院議員川島金次氏夫人、相馬雪香尾崎記念財団理事長代理など質的にも近来にない充実した代表団であった。地元テレビ局の、インターナショナルコーラスグループによる日本人歓迎風景の中継に始まり、榊さんよりアブオリジニー（オーストラリア原住民）のマーガレット女史へのうちわのプレゼント、水戸の星さんによる「ねぶた祭り」の8ミリ映写会、と日本代表団の民間外交にまつわる賑やかな話題が続き、日本人グループが出発する朝は、ニュージーランドマオリ族の婦人達がアクション・ソングをプレゼントして別れを惜しんだ。

—人間性と心を扱う経済学—

「私の当面するゴールの一つはやや野心的なもので、現在の経済学を変えるということです。」と前おきして木内氏は、今日の経済学が重症の病気にかかっているという点から論を進める。金から貨幣を分離したケインズ経済学が、

所謂社会的アプローチと、選挙民を喜ばそうとする民主的政府の願望とを伴ってインフレを引き起こす。更にコンピューターという大きなオモチャで統計と計量経済学を駆使する経済学は一般の人々と分離し、自ら病気に陥った。「勿論経済学はモノを扱わねばならない。したがって我われはただ数を放棄するわけにはいかない。しかし我われは心の世界、つまり人がどう感じるかを加えることができる。経済学者は経済学が科学であって欲しいと思う。しかし我われは物に人間性と心を加えねばならない。」

この講演後、会場の多くの人々から次つぎと質疑が寄せられた。「日本が風邪をひけば、オーストラリアが肺炎にかかる」と言われる程、日本市場と日本資本の動向に気を配るこの地域にとり、木内氏の主張は既成の日本に対するイメージとは異なる漸進的な発言とうけとられた。あるニュージーランドの代表が、同国政府がとった日本漁船の二百海里内からのしめ出しは、農産物輸入制限に対する報復的な政策で正しくない、と謝罪したのに代表されるように、既に質疑応答の時間自体が、木内氏の提案を実現させる為には、個々人がどういう生活様式をとり入れたらよいか、政府はどういう政策を遂行すべきか、という建設的な意見交換の場へと発展していった。そこには既に真の友情と信頼の場が築き上げられていた、と言えよう。

—アジアのトライアングル—

開会式には日本の藤田総領事も出席されたが、ボナー上院議員（豪州唯一人の原住民〈アブオリジニー〉選出）等と共に日本を代表して挨拶をされた杉田氏は一昨年のキャンベラ大会に続いての出席。同氏は常づね日本、オーストラリア、インドの三角形がアジアをリードするとの確信を提唱しているが、今回太平洋を囲むもう一つの三角形、日—米—豪の重要性を強調された。それはオーストラリアが難問の山積する日米間の真のとりもち役を担えるのではないか、というビジョンで、会議後このアイデアを聞いたフレーザー豪首相も感慨深くうなづいて居られたとか。フ首相は昨年六月の英連邦首相会議（ロンドン）で、日本が外圧の中で一九三〇年代後半に類似した心理状態になる危険を説き、自由社会団結の為の日本擁護を説いた程である。

—勇気あるステーツマンシップ—

アラン・グリフイス氏は現在外交、防衛に関する首相アドバイザー。MRA産業人会議（昨年五月東京）出席後、ロンドンのフレーザー首相に日本支援のアドバイスをしたのもこの人。グリフイス氏今回は最終日（一月十五日）のミーティングで〝ステノツマンシップ〟について講演。エジプトサダト大統領のイスラエル訪問を今世紀最大のステーツマンシップと述べ、その決断を喚起させた静かな時間と敬虔な勇気、又それを支えたMRA勢力の働きについての解説を加えた。彼は更に、サダトに匹敵する勇気あるステーツマンシップとして岸元首相の濠洲訪問と謝罪、及びマカリオス・キプロス大統領のマクミラン英首相訪問を挙げた。この二つの出来事とも、当時の政治状況からして常識的には不可能な政治的快挙で、例えば岸氏の濠洲訪問後わずか数ケ月で日豪通商条約が締結されたが、これは当時数年先になると思われていたことだ、とグリフイス氏は述べた。

グリフイス氏自身二十年前、外務省にあって、実際に岸訪濠の受け入れ準備をした人で、日本に対して良い感情を抱いていなかったグリフイス氏の母親の心を開いたのは当時の鈴木九萬駐濠大使夫人であった。当時の日本外務省の空気に反対して岸氏に謝罪を演説に盛り込むよう求めた鈴木九萬大使の勇気といい、これら勇気ある人々の輪（チームワーク）が、今日の日豪関係を導いた〝ステーツマンシップ〟を生んだといって過言でないだろう。

—献身する五人の日本女性—

会議がたけなわの間、メルボルンのMRAセンター（アーマ）では数名の残留部隊が大活躍、その一人が市橋よしえさん。ブリスベンの会議から数グループに別れてアーマを訪れた日本人のお世話に大奮闘。アーマ開設

（左から）パプア・ニューギニア、南アフリカ、（二人おいて）アブオリジニーと歓談する木内夫妻・杉田夫妻

討論に彩どりをそえるコーラス

時に日本から鈴木九萬大使を通して寄贈されたオークラチャイナも使って日本の味を大サービスとか。一方、会議中子供連れの参加者の為に育児室が設けられ、星玲子さんはこの担当。お母さん、おじいさん二人とも濠洲へ来た星さん、家族との語らいもほどほどにこの育児係の責任を立派に果たした由。中島めぐみさんは、昨年の「トレーニング・コース」も無事終了し、

会場中庭に勢揃いする日本代表

恩人のダニシ・ワシと彼女の国パプア・ニューギニアに向かい、日本人として此地で奉仕するとのこと。口先だけではない頭と心と手によるいたわり（ケア）を学びたいとか。父親（寒河江善秋氏）の死、交通事故を乗り越えた寒河江千鶴さんは、アーマのファミリーが昨暮世界各国へ送ったクリスマスカードのデザイナー。会議中も昨年の苦難克服のスピーチをし共感を得ていた。首都キャンベラで家庭滞在の長かった今橋政美さん、中国人、韓国人、それに日本人コミュニティでも多数の友人を作り民間外交ぶりを発揮。

勇気あるステーツマンシップでひらかれた日濠関係も、食料・原材料の輸入と機械類・加工品の輸出という経済優先のものに偏向しがちだったが、これら五人の方々（二月からは一人追加）が世界家族の上で献身されている様子を見る時、正に日濠関係も新たな力強い一ページを迎えているという感をぬぐえなかった。

―四つの謝罪と真のパートナーシップ―

会議の行なわれたエマニュエル・カレッジは川に沿った木立ちの多い寄宿舎、食事や大小のミーティングを通して触れあいのあるパートナーシップが形造られた。これだけ多くの国籍、人種、言語、文化が集まりながら、雰囲気も単なる親善会議に流れてはいない。それは、全参加者が、大きな共通の目的をもち、自分の経験に基づいて発言しているから。会議に深さと広がりを与えた三つのハイライトを拾うと、

①「我々（白人）のほとんどは、いい気なもので、オーストラリアは大した爆発もなく申し分ないと感じている。しかし我われは自らをアジア、太平洋地域としてとらえることをためらってはならない。そしてこの地域では、数多くの爆発が生じている。そして特にアブオリジニー（原住民）が苦しんできた。差別が起きている時、より大きな罪というのは、私のように自分自身や地球上の全ての他人について何が正しいか自分達が最もよく知っているというような無関心や傲慢さだと思う。このことについてどれほど申し訳ないことか。アブオリジニーの問題とか、移民の問題とか、避難民の問題とかいうものはない。これらは全て〝オーストラリアの問題〟であり、我々全てに責任があるのだから。」―ロン・ローラ・クインズランド大学卒業生（オーストラリア）―

②「七週間の入院後に主人が亡くなり私はパケハ（白人）の医者をうらんだ。私はやがて自分自身診察の必要ができた時、この白人医者を拒否し、心の恨みは白人全体へと拡がった。昨年MRAグループが町にやって来た時、インディアンの青年を泊めることを望んだが結果的には白人がわりあてられた。表面上は笑顔で優しく迎えたが、内心は違っていた。白人青年が立ち去ったあと息子が、『何がいけないの、ママ？彼は僕達と同じじゃないか。二つの目と耳と鼻が一つ、しゃべることもできる。彼もただの人間さ』息子のこの言葉が神に私を変えてくれることを祈らせた。私はこのパケハ（白人）を再び喜んで迎えることができ、私の十一年に亘る憎しみを謝罪した。』―レフ・ハエアー・主婦（マオリ族・ニュージーランド）―

③「オーストラリアに来て以来、私は白い南アフリカ人であることをとても意識している。私が話した多くの人びとはただ黒人の見解のみを聞きたがり、白人の胸を去来したことには耳をかさない。私はいつも自国の他人種の人々に同情的であったのでこのことはとても、とても苦痛に思えた。

私は理論上は人種差別政策を嫌ったが実践面ではそれをうけ入れていた。私はバスや列車の中ではむしろそれを有難いとすら思った。私はただ自分の心地

良さと安全のみを思ったからです。私は自分の自己中心さと、やればできたのにしなかったことを謝りたい。『私の生き方が国の生きざまを決める。』これは、もし自分の国が悪いなら、私自身も責められるべきだ、ということです。」―ルイス・エイブラハム・教師（南アよりの移民）―

―「平和な海」から「豊かな海」へ―

「平和な海」を目ざして参加した人びとは、お互いの体験を分かちあい、今や太平洋が「豊かな海」であることを識るに至った。この出会いの場を育てるMRAを総括して相馬雪香さんは、

「MRAは、国ぐにの間の信頼を築く最善の方法だと思う。我われは全ての人々に普遍的で、理解され、分けあたえることのできる精神的な価値を持たなければならない。日本の伝統的な精神的価値というものはMRAを通して普遍的なものに理解されることができる。」

最後に、この「豊かな海」への私の参加にご後援いただいた数十名の皆様に、この紙面を借りて深くお礼申し上げます。

●ベレスベイン大会に参加して●

娘と私

星　みや子

オペラハウスを背に星さんご一家

父上、母上様

新年おめでとうございます。

生れて初めて外地の暑いお正月を迎えています。オーストラリアは日本の様に新年を言っても特別の行事は何もありません。黒豆も、お雑煮も、あ年玉も無いちょっぴり淋しいお正月です。

玲子。

娘からの年賀状が正月前に届いて以来、落付かない新年を迎え、正月六日夜、二〇時発JAL七七一便の機上の人となった時は、おせち料理、お餅、漬物をかばん一杯に詰め込んで待望のオーストラリアに向う親馬鹿ぶりでした。

私がMRAを知ったのは一昨年の夏の終り娘の大学受験の為将来の進路を決めかねておりまして時、狩野安様からMRAの四つの標準、人は誰れでも変わる事が出来る、といった様なフランク・ブックマンの教えを聞いて決心を致しました。

その頃の娘は目的喪失と言うのか、自分の進む道に対する夢と現実のギャップの調整に疲れてか、『ママ、私をどうして生んで呉れたの、私、頼みもしなかったのに』私はこの言葉を聞いた時、本当にショックでした。そして私は子供に『もし貴女がこの世に生を受けた事を感謝する心があれば貴女がどんな道を選んでも貴女の人格を尊重する。が、頼まなかったと思うのなら、たしかに頼まれなかったのだから貴女は私の私物で居て欲しい。』

こんな親子の会話をとり交して数ケ月後の昨年三月十八日娘はオーストラリアの訓練センター、アーマに向いました。

娘から来る便りの中で子供が少しずつ変化し成長して行くのが解りました。しかし十ケ月ぶりに逢う娘にあまり大きな期待をする事は恐わかったし、それは娘にとっても大変迷惑な事であったと思います。

一月七日私達はブリスベンで行われるアジア大会の会場エマニエル・カレッジに着きました。会場の入口には各国の人々が私達日本人十七人を迎える為に集まってくれました。

私達は建物の入口で足を止めました。各国の若い人達が私達日本人の為に歓迎の歌〝ハイレマニ〟を合唱してくれたのです。若者の中には勿論めぐみさん、千鶴さん、娘の玲子が歌っています。私は一生懸命娘を追いました。何とか娘の声だけ探ろうとしたのですが娘一人の声だけを分けて聞く事は不可能でした。私はその時はっきりと娘が変った事を知りました。そして日本から行った若い人の全員が成長した事を喜びました。美しいハーモニーの中で国の違い、人種の違いを分ける事は出来ません。

三泊四日のブリスベン滞在中私は娘と二人きりで話をする機会はありませんでしたが、しかし風族習慣、言葉の違う二十六ケ国の人々の中で活躍する娘達の自然な後姿は、私に多くの言葉と安堵を与えてくれました。

経済不況がさわがれている中で迎えた一九七八年の正月に私の心だけは実に豊かであった事を感謝いたします。娘は十数ケ月前と違って自己改善にみごと挑戦し、未来に夢を持って自分で自分の道を歩きはじめた様です。数ケ月後インドのパンチガニーに出発する事と思います。めぐみさんも来月にはパプアニューギニアで活躍されるでしょう。

この若い人達が居る限り世界に無限の宝がある事を知って、私は未来に夢と自信を持つ事が出来た事に改めてハッピー、ニューイヤーを唱え、マオリ族の女性やフィジーの老人と固い握手を交しました。

今日を楽しむ者は花を活けよ
一年を楽しむ者は草花を植えよ
十年を楽しむ者は木を植えよ
五十年を楽しむ者は人を育てよ

私はこの言葉が大変好きです。MRAこそ文字通り今日の教育、未来の教育を啓発しています。

暑いお正月を娘と過して、今年程充実した事はなかった様に思います。最後に私共をオーストラリアに送って下さった狩野様をはじめMRAの皆様と主人に心から感謝いたします。

MRAの創始者

フランク・ブックマン博士の生誕百年を迎えて

今年（一九七八年）はMRAの創始者フランク・ブックマン博士の生誕百年の年です。

これについて先頃、ロンドンに集まったMRA国際チームは次のように伝えてきました。

一、ブックマン博士がMRAの啓示をうけた地であり、同時に終えんの地であるドイツのフロイデンシュタットで六月の第一週に大会を開き、次で六月十一日にはブックマン博士の生誕の地であるアメリカのアレンタウンで大会を開きたい。

フランク・ブックマン博士

一、私たちはMRAの思想と業績についての本を出版しようと準備しています。

一、この一年は世界中の物質主義に対する答としてのMRAの思想と哲学と情熱を各国が国ぐににみなぎらせるべきだと考えます。

一、物質主義は民族や国ぐにを分裂させる人類の敵であり、しかもインフレ、失業を生みだし、何百万の人びとを飢餓に追いやり苦難を与えている。さらにテロ行為や麻薬を通して都市と家庭をおびやかし国ぐにを戦争の準備においやっています。

一、それに応えるため私たちは、三つの武器を作ろうとしています。それをどのように考え、どのように作り、どのような価格で販布するか、そのために世界中の考えが必要です。私たちの考えている三つとは次のようなものです。

(1) 映画

MRAが次の段階であるという確信を語る場を人びとに与える。特に各国の指導者が道義的リーダーシップを覚醒し、確認をするチャンスを与えるものとしたい。

(2) 画報

映画の内容を普及させ一般の人たちがそれぞれの場所で解答を生きることができる偉大な使命を与えるようなものとしたい。

(3) ドイツとアメリカの大会に呼応してそれぞれの国で新聞記事（希望を与えるニュース）を作るべきだと思います。

百人から百万人へ

一九三八年八月、スエーデンのヴイスビーで、ブックマン博士は『革命について』と題して講演を行なった。これはMRAの歴史を大きく前進するものとなった。というのはMRAを単に自分の生活にとりいれて自己満足におちいっている人びとに対し警告したものであり、MRAをして国家的レベルで解答を与えるための戦線を形成するキッカケとなったものだからである。この挑戦に多くの人びとが立ちあがり、そして今日の国際勢力が作られていったのです。

さてこの講演の冒頭に次のようなことばが語られている。

「今日、わたくし達は融合された戦線をつくりたいのです。はっきりとわかっている根本問題は、わたくし達が神に導かれているか、いないかということです。

私がこの話しを終るまでに、諸君の幾人かが決心されることを希望します。わたくし達はいろいろ異った目的をもって、ここへ来ています。ある人たちは改変されようとしてきています。それは非常によいことだし、また非常に必要なことです。またある人たちは、他の人びとを改変する方法を学びにきています。それも非常に必要なことです。

しかし危険なことは、一部の諸君が、そこでとどまろうとすることです。わたくしは第三の目的に大いに関心をもっています。それはどうしたら崩れさろうとする文明を救えるかということです。それがわたくしの関心事なのです。しかし、もう一つ第四番目のねがいをもっています。それは世界の何百万の人びとに到達したいということです。

これらのことは、みな自然の順序にしたがって起るはずのものです。いったん諸君が変ったならば、自然に他の人を変えたいと思うでしょう。そのつぎには文明を救いたいと思うでしょう。最後には、世界の何百万の人びとに呼びかけたいと思うでしょう。それが自然の順序です。」

さてフランク・ブックマン博士生誕百年に当って私たちのなすべきことは多くあります。勿論、国際チームの呼びかけに対応して、大会への代表派遣、映画制作のための協力など考えられますが、前記の講演を読むとき

に、私たちが新しい決意でもう一度、起ちあがらなければならない必要を痛感せずにはいられません。

ブックマン博士のいう文明の崩かいを救うための戦線の拡充、一人一人が神の導きに従うという契約、そしてそれを百万人に到達させていくという博士の呼びかけに今こそ呼応すべきだと思います。

国際MRA日本協会はブックマン博士の生誕百年に当って次の規定で原稿を募集し、それをまとめて出版することを考えています。ブックマン博士と接触をもたられ方がた、MRAに会って感じた方がた。それらの言葉と経験をまとめて日本中の数百万の人びとに伝えていきたいと願っています。題して『百人から百万人へ』これはMRAの戦線につながるものと確信いたします。皆さまのご協力をお願いいたします。

●募集要領●

一、題　名　MRAと私

二、枚　数　四百字詰原稿用紙で二枚以上

三、〆　切　昭和五十三年四月末日まで

四、発送先　国際MRA日本協会

変革の条件

フランス人は訴える

message aux Français

Les Français veulent le changement. Quel changement ? Et quel prix sommes-nous prêts à payer individuellement pour l'obtenir ?

Quelle que soit la forme de société que nous nous donnerons, cette société ne pourra se bâtir ni se développer sans le changement de nos motivations et de nos comportements.

Il y a un choix plus fondamental encore que l'option entre la gauche et la droite. La vraie alternative est entre le bien et le mal, dont l'appréciation se forme au niveau de notre conscience. Ni la droite ni la gauche n'ont le monopole du bien ou le monopole du mal. Les critères économiques doivent céder le pas à des critères moraux et spirituels. Sinon, quel que soit le régime de l'avenir, nous construirons une société irrémédiablement matérialiste, où l'individu perdra à jamais sa dignité et sa liberté. Honnêteté, pureté, dévouement et amour sont les composantes nécessaires de toute communauté. Refuser aujourd'hui de mettre un terme à l'abus de nos droits et privilèges, à nos habitudes de fraude, à nos compromissions, à notre réflexe permanent de défense catégorielle rendrait vain demain tout changement de structures.

Les dirigeants politiques et les responsables des organisations économiques et sociales se doivent de montrer la voie en appliquant à eux-mêmes, dans leur action comme dans leurs déclarations, l'exigence de la vérité.

Si nous voulons être solidaires des plus défavorisés, nous ne pouvons prétendre, pour nous-mêmes et pour nos familles, à un niveau de vie toujours en hausse et un confort toujours accru ; il nous faut consentir à partager, donc choisir entre la satisfaction de nos appétits égoïstes et la solidarité à laquelle nous convient les immenses besoins de la communauté humaine.

En nous efforçant de respecter dans notre vie quotidienne le caractère absolu de ces principes moraux, nous, signataires de ce message, avons acquis la certitude que ce changement des mobiles et des comportements est possible, et qu'il est le garant des changements sociaux auxquels nous aspirons tous. Il est la condition de toute liberté et de toute vie démocratique.

Cet appel est diffusé sous l'égide du Réarmement moral.

Signatures au dos.

REARMEMENT MORAL 46 RD LAMORNE 75116 PARIS

フランスの総選挙は保革の決戦に追いこまれた。保守系のフイガロ紙は先頃、左翼連合51パーセント、保守系45パーセントと国民の支持率を予測し、左翼連合有利を報じた。ドゴール以降20年にわたる保守政権は後退しつつあるが、はたしてどのような政権がそのあとにくるのだろうか。

そうした中で、フランス国民に訴えるメッセージというものが人々に手渡された。署名者はMRAを生きる人びとでフランスの変革の根本的な要請を訴えている。その全文は次のような（左写真）ものである。

フランス人は変革を求めている。

しかし変革はどのようなものであるべきか。そのためにわれわれがどれだけの代償を払う用意があるか。

いかなる社会をえらぶにせよ、その社会の安定と成長はわれわれ自身の動機と行動が変化するか否かにかかってる。

選択は右か左かよりもはるかに深いところにある。

問題は善と悪の選択であり、われわれの良心で決定する。

善悪は右か左かに限定されるものでない。経済的な安定を求める前にまず道義的、精神的な基盤を求めるべきである。

それをしない如何なる形の政府ができようと、その社会は物質主義的となり、人々と個人は尊厳と自由を失うことになるだろう。

正直、純愛、無私、愛はいかなるコミュニティにも絶対に必要な要素である。

今日、われわれが権利と特権を利己的にまで固執し、道義的に妥協をし、自分の小さな利益を常に防御するようなことを反射的にやるのを止めなければ明日いかなる機構の変化が行われても無意味に終る。

政治的指導者及び経済・社会生活に責任ある人たちは自身の言動において自分たちが如何なる真実を生きるかをまず示すべきだ。

経済的に貧しく、特権なき大衆の肩の荷をわれわれも背負うつもりがあるならわれわれの家族を含めてわれわれ自身もより安楽さを求めるべきでない。

われわれはわかち合いの精神を身につけるべきである。

われわれの利己的な貪欲を満足させることをやめ、人類社会の責任を分担しなければならない。

この道義標準をでき得る限り生活にあてはめることを決心したわれわれは、このメッセージに署名するものである。

自分たちの経験を通じて動機と行動が変わることの可能とそれが社会に変革を及ぼすことを確信する。

これこそ真の民主々義とあらゆる自由の条件である。

国際MRA日本協会　〒151 東京都渋谷区代々木1－38 TEL03－374－7600